

カントと現代アート

2025年9月27日（土） 於 京都市立芸術大学

私たちが何気なく「現代アート」という時、その「現代」とは、そもそも何を意味しているのでしょうか？ アート＝芸術とは時代に関わりなく、人類永遠の営みではなかったのでしょうか？ いったいなにをもって「現代アート」が特別なのか？考えると混乱してしまうかもしれませんが、とにかく「現代アート」があるということは、「現代ではない」アートもある（あった？）ということの意味しています。それでは何が、「昔の（現代ではない）アート」と「現代アート」とを分けているのでしょうか？

「現代」の元になる英語の概念には、「modern（モダン）」と「contemporary（コンテンポラリー）」があります。「modern」は「近代」と訳されることもあり、「contemporary」は特定の時代に限定せず「同時代」という意味です。一般に芸術の区分を示す概念には、歴史的な意味と、規範的な意味があります。歴史的意味とは、現実の歴史における特定の期間に関係づけられるということです。それに対して規範の意味というのは、現実の歴史時代に関わらず、同じような区分や対立が繰り返し現れ、そこでの普遍的な対立を表示するものです。

芸術の歴史においては「古典主義」と「ロマン主義」という対立があります。それはたとえばヨーロッパの18世紀から19世紀に至る思想の流れについても言えますが、そうした歴史を離れて、人類文化におけるいかなる場所や時代にも適用可能な、規範的概念として用いることもできます。「古典主義」とは要するに、最高の文化はすでに達成されており、私たちはそれを模倣・変奏しているという芸術観です。言い換えれば、「進歩」なるものにはあまり意味がないということですね。それに対して「ロマン主義」というのは、人間が時間経過とともに新たな経験をし、それを表現にもたらすという芸術観です。私たち現代人は、だいたい進歩を自明の前提とし、新しさに価値をおく傾向が強いですから、基本的にはみんなロマン主義者ということになります。

それに対して、カントは古典主義者です。しかし、本人はその自覚がありません。なぜなら、18世紀啓蒙主義の時代には、上に述べたような対立軸の中で自分が「近代（modern）」に属するという意識が希薄だからです。その理由は、一つは産業革命がまだ始まったばかりで、人々の生活意識にはまだ深刻な影響を及ぼしていないからです。もう一つは、フランス革命以降の市民社会、国民国家とその限りにおける文化という考え方（たとえば哲学者とはある領域の専門家で大学等に所属し、思想領域で国家や人類の発展に寄与する、等々といった理解）がまだ成立していないからです。いろんな意味で、カントは同じ近代人とはいっても、私たちの世界からみると、ある壁のギリギリ向こう側にいる人なのです。

さらに、カントはドイツの哲学者と考えられていますが、ドイツといっても現代のドイツ連邦共和国と同じではなく、プロシアという国の、ケーニヒスベルク（現在のロシア領カリーニングラート）という街に生まれました。カントはフリードリヒ大王に献辞は捧げますが、国民意識はありません。自分を特定国家の成員ではなく「世界市民」と考えていました。

しかしそのカントの美学が、2世紀近くの時間を隔てて、20世紀後半の現代アートを意味づけるために使用されました。1960年代までアメリカの美術批評を牽引したクレメント・グリーンバーグという人がいます。彼は西洋近代の伝統的規範から逸脱した「現代（同時代）アート」を、カント美学の「直感的判断」に基づいて批評しました。カント美学（1791年）からグリーンバーグの批評（1930年代末以降）までは、およそ一世紀半に及ぶ時間的隔たりがあります。その間に起こったことが、今の私たちがなぜ世界をこのように見るのか、なぜこんな考え方をするのか、という思考の基本フォーマットを決定しています。しかし私たちは19世紀をまともに理解しようとしません。20世紀に起こった世界の激変（二度の世界戦争他）に幻惑されて、基本的な歴史の流れがまったく見えなくなっているというのが現状です。

私たちとは異なる時代に行われた思考に触れるために、カント美学のエッセンスを最後に紹介しておきたいと思います。